

Hevajratantra に見られる mantra について

頼 富 本 宏

実在の世界に速かに参入することをその究極目的とする密教の聖典・論書において、mantra の果たす役割を無視することはできない。伝統的表現では、密教の実践修行は身・口・意の三密行からなると言われ、そのうち言語的な面で実在と現象の相即を保証するのが、mantra、もしくは dhāraṇī である。

ところで、一口に密教と言っても、独自の歴史的発展の過程を経ており、各段階で使用される用語の意味内容も決して同一ではない。mantra を例にとつても、caryā, yoga 階梯の tantra で用いられる mantra の意味や役割と、Hinduism の影響が色濃い anuttarayoga 階梯の tantra における mantra の形態や役割には幾分相違があることは否めない。

本論で取り上げる Hevajra-tantra¹⁾ (HV) は、無上瑜伽タントラの母タントラに属する重要聖典である。HV には相当数の mantra が認められるが、その大部分が第一儀軌 (Prathama-kalpa) の第二品 Mantra-paṭala に収録されている。同品は、大別して二つの部分からなり、前半部では 19 種類の重要な mantra がその名称とともに列挙されている。一方、後半部は儀軌の要素を持ち、雨を降らす mantra、敵軍を撃破する mantra などが詳しい修法とともに説かれている。したがって、民俗学的もしくは文化史的にはむしろ後半部の方に興味深い点が多いが、逆に教理的な色彩は希薄である。そこで、本論では、前半部の mantra の中で、とくに bali-mantra と五仏の bija-mantra を取り出して、その形態に注目し、それらが HV の主要教義、すなわち五仏や四歓喜の思想といかなる関連を持つているかということを検討してゆきたい。

ところで、HV に限らず、いずれの密教聖典についても言えることであるが、神聖な言葉である mantra や dhāraṇī は、それを唱えるだけで十分であり、煩瑣な説明や解釈を加えないのが通常である。修行者はそれを分析・吟味することによつてではなく、ひたすらそれを誦持し、禪定に没頭することによつてのみ仏

1) D. L. Snellgrove: The Hevajra Tantra, A Critical Study, 2 vols., London, 1959.

となることのできるからである。それゆえ、あえて mantra, dhāraṇī から教義的・思想的なものを読み取ろうとすれば、何らかの補助手段を必要とする。

HV の mantra を考察する場合、その理解を助ける二種の方法がある。第一は、同じ HV の第二儀軌 (Dvitiya-kalpa) の第九品 Mantroddhāra-pāṭala である。ここでは Mantra-pāṭala 前半部の 19 mantra のうち、17 の mantra が個々の文字に分解され、yogin が誤つて記憶することのないよう便宜が図られている²⁾。

次に補助手段となるのは、HV に対する註釈書群である。般若・母タントラの中心聖典である HV には多数の註疏が残されているが、本論で依用したものの名称・略号・作者・北京番号を列挙すると次のごとくである (以下略号を用いる)。

〔表 1〕

略号	註釈書名	作 者	北京番号
P A	Hevajra-piṇḍārtha-ṭikā	Vajragarbha	No. 2310
P M	Hevajra-tantra-pañjikā Padminī	Saroruhavajrā	No. 2311
V V	Śrīhevajrasya vyākhyā-vivaraṇa	Bhavabhaṭṭa	No. 2312
Y R	Yogaratnamālā-nāma-hevajra-pañjikā	Kṛṣṇa	No. 2313
S S	Śrīhevajra-tantrarāja-ṭikā Suviśuddhasaṃpuṭa	Ṭaṅkadāsa	No. 2314
V P	Vajrapadasāra-saṃgraha-pañjikā	Nāropa	No. 2316
S N	Hevajra-nāma-mahātantrarāja- dvikalpamāyā-pañjikā Smṛtinipāda	Kṛṣṇa	No. 2317
M V	Śrīhevajra-pañjikā Muktikāvalī	Ratnākaraśānti	No. 2319
N V	Śrīhevajra-mahātantrarājasya pañjikā Netravibhaṅga	Dharmakīrti	No. 2320

これら二種の補助手段と、さらに HV にもとずいて後代に作成された Sādhana-mālā (SM)³⁾、Niṣpannayogāvalī (NY)⁴⁾ などの sādhana-saṃgraha を参考にして論を進めてゆくこととする。

(1) Sarvabhautikabalimantraḥ/

OM akāro mukhaṃ sarvadharmāṇām ādyanutpannatvāt

2) このような mantra の記憶法については以下の論考がある。

B. Bhattacharyya: An Introduction to Buddhist Esoterism, Calcutta, 1932, pp.55~61.

酒井紫朗: 真言 (mantra) の記憶詩について, 密教文化 31, pp. 1~8.

3) B. Bhattacharyya: Sādhanamālā, 2 vols, G. O. S. Nos. 26. 41, Baroda, 1925~28.

(52) Hevajratantra に見られる mantra について (頼 富)

OM ĀḤ HŪṂ PHAṬ SVĀHĀ/

これは一切の精霊 (bhautika, ḥbyuñ-po) に供物 (bali) を供養する mantra であるが、同じ mantra が HV の第二儀軌の第四品 Hevajrasarvantramudraṇa-piṇḍārtha-paṭala に次のように説かれている。

「EVAM の字に安住している金剛薩埵 (Vajrasattva) は有情の生命を障碍や困難から守るために、供物を (精霊達に) 与えるべきである。

オーン、A 字は一切諸法の門である。本来不生であるから。オーン、アーク、フーン、パット、スヴァーハー」⁵⁾

すなわち、この mantra を誦することにより、すべての bhautika に供養すれば、あらゆる障碍から免かれ、速かに悉地 (siddhi) を得ることができるのである。bali-mantra には他にもいくつかの種類があるが、この mantra は相当普及していたと考えられ、SM にも同様の用例が認められる⁶⁾。

mantra の内容である阿字門本不生という表現は、「大品般若経」広乗品⁷⁾、「大日経」具縁品⁸⁾に見られ、また類似した表現は、Kamalaśīla の Bhāvanākrama 初篇に Buddhasaṃgīti の言葉として引用されている⁹⁾。とくに、mantra 前半部 (akāro mukhaṃ sarvadharmāṇāṃ ādyanutpannatvāt) は、HV の他の mantra とは異なつて教義的色彩の強い表現であり、各註釈書とも、それぞれの立場から説明を加えている。なかでも、Ratnākaraśānti の MV が無相唯識の立場から¹⁰⁾、また Dharmakīrti の NV が簡単な推論式を用いている点¹¹⁾が目をひく。

後半部分の OM ĀḤ HŪṂ PHAṬ SVĀHĀ について言えば、各語とも一般に見られる bīja-mantra である。とくに OM ĀḤ HŪṂ の三字は同じ Mantra-paṭala に、

kāyavākcittādhiṣṭhānamantraḥ/ OM ĀḤ HŪṂ¹²⁾とあるように、身・口・意の

4) ditto: Niṣpannayogāvalī of Mahāpañḍita Abhayākara Gupta, G. O. S. No. 109, Baroda, 1949.

5) D. L. Snellgrove: op. cit, part II, p. 74.

6) B. Bhattacharyya: Sādhana-mālā, vol. 1, p. 448.

7) 大正藏, vol. 8, 256-a.

8) ibid., vol. 18, 10-a.

9) G. Tucci: Minor Buddhist Texts, vol. 2, Roma, 19, p. 199. punar atraivoktam/ akāramukhāḥ sarvadharmāś cyutyutpattivigataḥ/

10) 北京版, vol. 54, 85-2-2~8.

11) ibid., 119-4-1~2.

12) D. L. Snellgrove: op. cit, p. 6.

三密を加持 (adhiṣṭhāna) する mantra である。この mantra は、父タントラである Guhyasamāja-tantra (GS) の重要教義であり、後述の五仏の bija-mantra にも少なからぬ影響を与え、無上瑜伽密教全般を通じて広く用いられている¹³⁾。

語末の PHAṬ, SVĀHĀ は、それぞれ破摧、成就の mantra として知られているが、五字全体の mantra は余り用例を見ず、HV 独特のものと推測される。SS は PHAṬ と SVĀHĀ を prajñā と upāya の二大原理に配している¹⁴⁾。以上のように、元来教義的な用語が balī-mantra になつたについては、密教がその修行法において、教理を次第に行法化していつた、いわゆる「儀軌化」の一面を想起することができよう。

(2) tathāgātānām bījam/ BUṀ AM JRĪM KHAM HŪM/

Mantra-paṭala の mantra の中で、最も特徴的かつ複雑なのは、諸如来の種子 (bija) である。諸如来とは、Vairocana (大日)、Ratnasambhava、(宝生)、Amitābha (阿弥陀)、Amoghasiddhi (不空成就)、Akṣobhya (阿閼) の五仏を指す。

ところが、この五仏の種子の表記に少なからぬ問題点がある。次に Skt. 写本、Tib. 訳および各註釈書に見られる五仏種子を対照すると表 2 のようになる。

表中の Akṣobhya の HŪM, Amoghasiddhi の KHAM に関してはまったく問題はない。次に Ratnasambhava については、Skt. 資料はすべて ĀM を示し、また Tib. 資料はおおむね AM を支持する。Amitābha には一部に、そして Vairocana にはかなりの不統一が認められる。

この問題に解決を与えるのが、Mantroddhāra-paṭala の mantra 解釈である。そこには五仏の bija-mantra の説明は存在しないが、五仏の bija のすべてが HV の七種法 (stambhana, vaśya, uccāṭana, vidveṣaṇa, abhicāruka, ākarṣaṇa, māraṇa) の mantra に組み込まれているので、それより五仏種子の完全な形を復元できる。

いま、Ratnasambhava の種子に関連して vaśya の mantra 解釈を例にとる。「最初に文字の主 (OM) を置き、次いで空行明妃 (Khecari)、そして SVĀHĀ を最後に付すならば、諸仏さえ自在にできるであろう」²¹⁾

紙面の都合で詳細に論じられないが、Mantra-paṭala の, yoginīnām bījam/ A, Ā, I, Ī, U, Ū, Ṛ, Ṝ, Ḍ, Ḍ̄, E, AI, O, AU, AM, AH/ という mantra と Mantroddhāra-paṭala の記述から、HV では各母音 (āli) が 15 明妃 (yoginī) に配されていることが知られる (表 3)。

13) A. Bharati: The Tantric Tradition, pp. 132~133.

14) 北京版, vol. 53, 167-1-2.

〔表 2〕

	Vairocana	Ratnasambhava	Amitābha	Amoghasiddhi	Akṣobhya
HV(Skt-a) ¹⁵⁾	BUM̐	ĀM̐	JĪM̐	KHAM̐	HŪM̐
HV(Skt-b) ¹⁶⁾	BUM̐	ĀM̐	JRIM̐	KHAM̐	HŪM̐
HV(Skt-c) ¹⁷⁾	BRUM̐	ĀM̐	JRĪM̐	KHAM̐	HŪM̐
HV(Skt-d) ¹⁸⁾	BUM̐	ĀM̐	JRĪM̐	KHAM̐	HŪM̐
HV(Tib-Nar.)	BRUM̐	AM̐	JRIM̐	KHAM̐	HŪM̐
HV(Tib-Pek.)	BRUM̐	ĀM̐	JRAM̐	KHAM̐	HŪM̐
PA	BUM̐	AM̐	JRIM̐	KHAM̐	HŪM̐
VV	BHRUM̐	AM̐	JRIM̐	KHAM̐	HŪM̐
SS	BHRUM̐	AM̐	JRIM̐	KHAM̐	HŪM̐
VP	OM̐	AM̐	HRĪḤ	KHAM̐	HŪM̐
SN	BRUM̐				
MV	BRUM̐	AM̐	JRIM̐	KHAM̐	HŪM̐
Mañjuvajra- maṇḍala ¹⁹⁾	BUM̐	ĀM̐	HRĪM̐	KHAM̐	HŪM̐
Cakrasaṃvara- tantra ²⁰⁾	BHRUM̐	AM̐	JRIM̐	KHAM̐	HŪM̐

〔表 3〕

a. Nairātmyā,	ā. Vajrā,	i. Gaurī,	ī, Vārī
u. Vajraḍākinī,	ū. Pukkasī,	ṛ. Śavarī,	ṛ. Caṇḍālī,
l. Ḍombinī,	ḷ. Gaurī,	e. Caurī,	ai. Vettālī,
o. Ghasmarī,	au. Bhūcarī,	am. Khecarī.	

したがって先の文から再構成される mantra は、

OM̐ AM̐ SVĀHĀ/

となり、Ratnasambhava の bija は AM̐ であることが証明される。同様に Vai-

15) G. Tucci 氏所有の Skt. MS.

16) Cambridge University Library 所有の Skt. MS.

17) Asiatic Society of Bengal 所有の Skt. MS.

18) 京大所有の Skt. MS.

19) B. Bhattacharyya: Niṣpannayogāvalī, p. 4.

20) Kazi Dawa-samdup: Shrichakrasambhāra Tantra, Tantrik Texts, vol. 7, Calcutta, 1919, p. 50.

ここでは五智 (pañca-jñāna) に配されているが、五智は五仏に包括される。

rocana には BUM が, Amitābha には JRĪṂ が bīja として確定される。

このように, HV の五仏の bīja-mantra が明らかとなつたが, 先述の表 2 から以下の諸点が注意されねばならない。まず第一に, Vairocana の bīja が安定性を欠いている点である。HV が本来的には BUM を説いているにもかかわらず, チベット資料はほとんどが BRUṂ もしくは BHRUṂ を支持している。

さらに留意されるべきは, 註釈の一つである Nāropa の VP の説である。VP は Mūlatantra (HV) の主張に相違して, Vairocana に OM, Amitābha に HRĪḤ をあてる説を採用している²³⁾。これは, HV の五仏種子説と平行して, 別の有力な五仏種子説が存在していた事実を示唆すると考えられる。

そこで HV 以外の五仏種子説を可能な限り収集すると次表のごとくである。

[表 4]

	Vairocana	Ratnasambhava	Amitābha	Amoghasiddhi	Akṣobhya
略出念誦經 ²⁴⁾ ・ 二卷本教王經 ²⁵⁾	VAM	TRĀḤ	HRĪḤ	AḤ	HŪṂ
諸仏境界摂真実經 ²⁶⁾	OM	JA	HO	SA	HŪṂ
Vajrāsanaśattāra- kasādhana ²⁷⁾	OM	TRĀḤ	HRĪṂ	KHAM	HŪṂ
Prajñāpāramitāsā- dhana ²⁸⁾	OM	TRĀṂ	HRĪḤ	KHAM	HŪṂ
Pañcākāra ²⁹⁾	OM	TRĀṂ	HRĪḤ	KHAM	HŪṂ
Ādikarmapradīpa ³⁰⁾	OM	TRĀṂ	HRĪḤ	KHAM	HŪṂ
Pinḍīkṛtasādhana ³¹⁾	OM	SVĀ	ĀḤ	HĀ	HŪṂ

21) D. L. Snellgrove: op. cit, p. 92.

22) ibid., p. 6.

23) 北京版, vol. 54. 9-1-6~7.

24) 大正藏, vol. 18, 242-b.

25) ibid., 317-b.

26) ibid., 275-c~276-a.

27) B. Bhattacharyya: Sādhana-mālā, vol. 1, p. 18.

28) ibid., p. 322.

29) H. P. Śastri: Advayavajrasaṃgraha, G. O. S. No. 40, Baroda, p. 41. 同じ著者の Kudṛṣṭinirghātana にも同様に見解が認められる。ibid, p. 5.

30) Louis de la Vallée Poussin: Bouddhisme, Études et Matériaux, London, 1898, p. 198.

31) ditto; Études et textes tantriques, Pañcakrama, Gand, 1896, p. 4.

32) D. L. Snellgrove: op. cit, p. 92.

上記の表中、日本密教で最も誦持されたのは、金剛智訳の「略出念誦經」、不空訳の「二卷本教王經」に説かれているバン (VAM)、ウン (HŪM)、タラク (TRĀḤ)、キクリ (HRĪḤ)、アク (AḤ) のいわゆる金剛界五仏種子説である。

ところが、この説は後代のインド密教の資料にはほとんど見られず、むしろ表 4 にあげた Advayavajra の Pañcākāra の説が一般に流布していた。すなわち、Vairocana に OM を、Amoghasiddhi に KHAM を配する。Ratnasambhava は TRĀM と visarga から anusvāra に変化する。後者の説の方が有力であつたことは、各種の sādhana に散見される五仏の種子が多くこの形態をとり、加えて HV の註疏である VP でさえ、Ratnasambhava の種子を AM とする HV の説に従いながらも、Vairocana と Amitābha については、それぞれ OM, HRĪḤ という HV とは異なつた種子に依つていた事実からも容易に窺うことができる。

現在のところでは、Saṃvara 系タントラを始め、他の母タントラを十分に検証するには到らず、わずかに Cakrasaṃvara-tantra のチベット訳から HV と同系統の五仏種子を見出し得るだけの段階であるので、HV の説を母タントラ全体に敷衍することはできない。しかし、正確を保たれるべき bīja-mantra であるにもかかわらず、すでに HV 自身の中で Vairocana に OM 字をあてたり³²⁾、かつ上述のように註釈書間で不統一を示していることから考慮すると、この五仏種子説の影響に疑問を抱かざるを得ない。

さらに、五仏に関して言えば、無上瑜伽タントラで Akṣobhya が最高位を占めたのは、一つには dveṣa-kula を代表する仏格であり、無上瑜伽タントラの主尊の多くが忿怒尊であることにもとづくのであろうが、上に論じた五仏種子説から判断するならば、bīja の安定を欠く Vairocana には、すでに caryā, yoga 階梯の tantra のそのような卓越した力はなく、逆にまったく HŪM で統一された Akṣobhya が五仏の中で次第に優勢となつてゆく有様も十分に理解される。

五仏種子説には、この他にも表 4 で触れた Piṇḍikṛtasādhana の説があり、GS 系タントラの OM ĀḤ HŪM の三密加持の mantra と一体となつて、チベット仏教、とりわけ Dge-lugs-pa などで重視されたが、これらの問題については別稿を期したい。とあれ、このような bali-mantra や bīja-mantra の形態からもタントラ仏教の本質とその変遷の一面を把握することができるのである。